
文明の砂漠

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文明の砂漠

【Nコード】

N2047R

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

既に人類も文明も滅びてしまった太陽系を観光に訪れた銀河人の父親と娘の会話。荒廃した地球を題材に、父親が娘に勉強を教えます。

(前書き)

遠い宇宙を旅する父親と娘のお話。
語られているのは、最も身近な場所だったり。

「パパ、せっかくのバカンスなのに、こんな片田舎のオリオン腕に来てどうするの？」

娘にそう言われた父親は、優しくゆっくりと娘を諭すように言った。

「ここには『銀河遺産』があるんだよ」

娘はガイドブックの「オリオン腕」の項目を開いた。

「……そんなもの、載ってないわよ」

父親は、ニヤリと笑いながら娘に言った。

「そうだよ、まだ最新版のガイドブックにも載ってないよ。まだ、一ヶ銀河月ほど前に『銀河遺産』に指定されたばかりだから」

娘はガイドブックをパタンと閉じた。

「へえ、そうなの。それじゃあ、この今銀河年度のガイドブックにも載っていないわね」

父親は、宇宙船のパネルを操作しながら言った。

「この先一光年ほどの距離に『太陽系』と呼ばれた恒星系があるんだよ。恒星系の成り立ち自体はかなり古いのだけれど、周回している惑星に文明が起こってから僅か一万とちよつとの恒星公転回数で滅んでしまったらしいんだ」

娘は観測装置を眺めながら相槌を打った。

「ふん」

父親はスクリーンに青い惑星を映し出した。

「この恒星系の、内から三つ目の惑星だ。記録では『アース』と呼ばれていたそうだ」

娘はスクリーンに見入った。

「わあ、キレイ。とっても青い星なのね。……でも、なんかボケてるわ、この画像」

父親は、娘に笑顔を向けた。

「でも、今はもう青くもキレイでもない。細かい砂に覆われた黄色の惑星になってしまったんだ」

そう言って、父親はスクリーンに黄色い惑星を映し出した。

娘はひどく落胆した顔をした。

しかし、娘は少し首を傾げてから、すぐに父親に質問をした。

「今は黄色い星になっちゃったのに、どうして『青い星』の時の画像があるの？」

娘は自分で質問をしながらも自分に突っ込みを入れるように、回答らしい事柄を自分で言った。

「もしかして、素粒子のタイムシフト効果で調べたとか？」

父親は、娘に柔和な表情で答えた。

「いや、そんな高度な手法を使っただけじゃないよ。もっと単純なことなんだ」

娘は、父親の言葉に少しの間、想いを巡らせていたがすぐに音を上げた。

「えー、わかんないよー」

父親は、微笑んで娘に説明を始めた。

「この『アース』には宇宙に機械を送り出せるほどの文明が起これたらしくて、機械を宇宙に飛ばしていたんだよ。この恒星系からずいぶん離れていたその機械を、我々銀河人のフィールドワークマシンが捕捉したという訳なんだ」

娘は、ちよつと意外だったという顔をした。

「へえ、そうなの。それってちよつとビックリだわ」

娘の表情を見ながら、父親は説明を続けた。

「その機械から『アース』の情報が書き込まれた、かなり原始的な記録メモが発見されて、そこから『アース』の存在が明らかになったんだ」

娘はしたり顔になった。

「だから“青い星”の画像がボケていたのね」

父親は娘の言葉にうなずきながら、話を続けた。

「だけど、我々銀河人の使節団が『アース』を訪問した時には、既にアース人は絶滅し文明も滅びていて、何の痕跡もなかった」

娘の目の色が変わってきた。

「それじゃあ、銀河人は誰もその人達の姿を知らないのね」

父親は頷いて言った。

「そうなんだよ。『幻のアース人』って呼ばれているんだ。我々の使節団はすぐに調査団へと成り変わったんだ。そして、この恒星系をくまなく調べたんだ」

娘は身乗り出してきた。

「それで、どうなったの？」

父親は、最新の観測情報をギャラクシー・ネットから検索してスクリーンに表示した。

「恒星回転面を周回する惑星は八つだった。だが、恒星の膨張で内側の惑星が一つ、飲み込まれていたんだ」

スクリーンには、恒星を中心とした部分が拡大表示された。

「そして、その中の四番惑星の周回軌道に一機、地表に五機の機械を発見した。それから五番目のガス惑星を周回する惑星にも機械を発見した。そしてアースを周回する惑星にも機械があった」

娘は小躍りしてこう言った。

「すごいわ」

だが、父親は少し表情が暗くなった。

「でも、それだけだった。確かにひどく荒れた恒星系で、各惑星の進行速度は軒並み遅くなっているんだ」

スクリーンには惑星の運行スピードの表示に切り替わっていた。

「どうやら、かなりの数の機械を宇宙に送り出していて、その機械のスピードアップのために惑星を利用したようだ。その影響で、四次元における重力効果が変動したんだ」

娘がそこで答えを言った。

「それで星が膨らんだ訳ね」

父親は頷いた。

「そう、その通りだ。良く分かったね。そうなんだよ。今では、恒星系全体が枯れ果てたようになってしまったんだ」

娘は得意げな顔をして言った。

「私、学校で習ったわ。それって“砂漠”っていうんでしょ？」

父親はニコニコして言った。

「よく勉強してるね。その通りだよ」

父親はスクリーンを消した。

「今はまだ調査中だけど、特別に系外からの見学はOKなんだ」

娘はスクリーンから離れて駆け出そうとしていた。

「じゃあ、観測室のグラビティ・スコープで見るのね。うわー、楽しみだわ。早く行きましょ」

娘は父親の手を取って、父親を急かすように宇宙船の観測室へと向った。

観測室の重力偏光望遠鏡で、文明が消え去って黄色い惑星と化したアースを、娘はいつまでもしげしげと眺めていた。

（後書き）

地球のことを書いているけれど、地球のことじゃないみたい。
そんな不思議な感覚を味わっていただけなら本望です……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047r/>

文明の砂漠

2011年2月26日03時12分発行